

若い人たちに語り継ぎたい、
次の世代に残しておきたい。
貴重な話をお届けしますー。

あすへひとこと

いつの時代までも残したい

邑楽町の昔ばなし



大字石打字渋沼地内にある砂田稲荷神社。衣食住、特に稲の生成を守る神を奉り、古くから人々のよりどころとして親しまれています。

「渋沼」の地名について

この集落には、里人のよりどころとして、大字石打字渋沼の鎮守には、砂田稲荷神社と阿弥陀堂があり、一方の大字藤川字渋沼の鎮守は八幡神社（八幡宮）と観音堂（十九区公民館と併用）となっている。

さて、「渋沼」の地名のいわれであるが、一つ目には、「渋」とは鉄分を多く含んだ赤さび状の河川や湖沼などの水の色合いを一般に「シブ色」と呼ぶことからとか、また水はけの悪い地形をした沼沢地（邑楽地方では、雨期に浅い沼や池が出現し、乾期にはさらに浅くなり、時には沼底が姿を見せる。岸や水中にまで湿地性の植物群が繁茂する場所）があると聞いたことがあります。

したがって、地名のごとく、現「渋沼」集落の近辺は、主に渡良瀬川の影響を受けて形成された沖積低地といわれる、地質年代ではごく新しい年代の地形と聞いております。河川の流れや洪水などの影響によって形成された沼の存在が、そこに生活基盤を置いて暮らす人々たちによって、いつしか沼の特徴を表現する地名として呼ばれるようになり、固定したものと推察しています。

二つ目には、集落の東方にある「藤川

堰遺跡」の発掘調査が平成8年に町教育委員会によって実施されたのを記憶しています。

自宅から近いので時折発掘作業を見に行き、現在の田んぼ（水田圃場）の下50センチに平安時代の水田跡が現れました。田んぼには大人や子どもの足跡など無数にあり、また馬か牛と思われる農耕のための牛馬の足跡も鮮明に残されていました。

そして田んぼには畦畔が東西南北にはっきりと直線上に現れ、畦畔の直線を西に辿ると、その延長線上に長野県境の浅間山が、北にたどると日光の男体山がピタリと計画した土木事業のように一致していたことは驚かされました。つまり畦畔の方向が現「渋沼」集落を基点に東西、南北を指して水田計画が造成されていたこととなります。

これらのことを考えると東、西、南北、つまり4つの方向に分ける意味から、条理制を意味するものとして、「四分」をいつのころから分かりませんが「渋」の字に置き換えて、一つ目の地名のいわれに同じく、近辺の池沼と併せて現在の「渋沼」になったとも考えられます。

※畦畔：水田に流入させた用水が外にもれないように、水田を囲んで作った盛土の部分。

【発行】邑楽町老人クラブ連合会 【編集】あすへひとこと編集委員会
(平成28年3月31日発行「邑楽町の地名(第十一集)あすへひとこと」)より一部抜粋

ひとりごと From editors

▶今年はいつもに比べて梅雨らしい日というのが少なかったように思えます。雨が少なければ過ごしやすいのですが、水がないと農業などでは死活問題なので、一概に良いとは言えません。誰かの幸福も、他の誰かにとっては不幸ということは往々にしてあるもので、物の捉え方は人それぞれ。万人にとって良いものを作るというのは難しいことだと改めて考えさせられます。▶ところで、懸賞などに応募したことはありますか？私は当選したことがほぼありませんが、自分が外れた分、他の誰かが幸せになったと思えば少しは気も紛れます。いずれにしろ応募をしないことには何も始まりません。今月の広報クイズは切手シートが当たりますので、この機会に挑戦してみませんか？(小谷)



梅雨の晴れ間
(中野地内)



Photo 広報担当者◎

